

『とうほくの社会科教室』1962年10月（東京書籍）

一人一人の思考を育てる

国立教育研究所 矢口 新

思考力を育てるためには思考をさせる以外にない。恰も、水泳ができるようにするためには、水の中へ入れて泳がせる以外に手がないと同様である。水の中で泳がせるといっても、ただ水の中へほうりこむことだけではない。そんなことをしたらおぼれ死んでしまう。だから極めて基礎的なことから、だんだん教えこんで行くわけである。その段階は極めて細かくきざんでやることはみんなよく知っている。

社会について、思考をするということは、ちょうどそれと同じようにして育てられるものである。やはり基礎的なことからだんだん積みあげて行くのである。泳ぐというのは、水の中で泳ぐように、あるものに対して行動の仕方をおぼえることである。水との関係で身体の動かし方をきめるのである。社会では何に対して思考の仕方をきめるのか。それは社会現象といわれるものである。いわば社会現象という水の中で、泳ぎ方つまり思考の仕方を身につけるのである。

社会現象について思考するというこの考え方はまだ歴史的に新しい考え方である。それでなかなか身につかないのである。社会科がそういう点で弱いのは致し方のない事だともいえよう。その点では、教師も生徒も、これからそういう修業をする段階なのである。

まず第一に、社会の現象として物を見るという見方を訓練しなければならない。われわれの目にうつるものは全体的なものが目にうつるのであって、決して社会現象が目にはうつるのではない。

それをものではなく社会現象として見るという訓練もなかなかむずかしいことである。そういう訓練もごく基礎的なことであるから、たえずそういう見方を生徒に自覚させることが必要である。もっとも意識しては社会現象として見ないが、現実的にはそうやっているということも多いのである。社会科はそれを体系的にやっているのである。たとえば、われわれは日本の農業というようなものの言い方をするが、実際に日本の農業というものを見ることはできない。一人一人の百姓が仕事をすする所だったり、田畑だったりが見えるのである。しかしそれを日本の農業のあらわれとして見ているのである。また日本の農業を全体として見るために、統計をつかったりする。それは単に数字でしかないが、それを日本の農業をあらわすものとして見ている。こういうものの見方は抽象的な見方というのであろうが、そういう見方を育てることはたいせつなことである。

そういう現象としてみる見方の上に、こんどはそれをならべて様々に関係をつけてものを考えているのである。その現象の関係のつけ方を訓練することがたいせつである。こういうことも、これ迄あまり重視されていなかった。話は古くなるが、カントが物理学の成立するためのものの考え方として12の範疇というものを述べている。それは、自然現象をみて、これを判断していく時に人間が使う思考の方式といったものである。われわれは、判断の結果は、これは何々であるという風に表現するが、その判断は、例えば、数量に関

しては、1つであるか、多数であるかという風に判断する。或は物のあり方についての判断として、可能なのか、不可能なのか、或は存在するか存在しないか、或は必然的なのか、偶然なのか、などという風に判断する。そういうものの組み合わせで、理論がくみ立てられて行く。そういう思考の方式をカントは12出している。この12自体はいろいろ問題もあるが、私が言いたいのは、一つ一つの現象を見て、そこで考えて行くときに、どういう思考をしているのかということをはっきりさせなくてはならぬ。そういうことがあいまいで、理くつを言って居てはよくわからないことを言っていることになるのである。そういう厳密な訓練をすることがたいせつである。

もう一つ最後に、これまでのような一斉授業で、

話し合いをしているだけでは、一人一人の子供が、厳密にそういう思考をやっているかどうかはわからない。50人もが話し合っているのは、或は教師との問答をしては本当に責任をもって、現象を判断して理論の筋道をたて思考している子供は幾人もいないであろう。それでは結局ルーズな甘い考え方で、物事を考えるくせがついてしまう。従来の社会科の授業では、この点が一番忘れられていたことである。結局は教師一人が考えていることになってしまって、子供が考える努力をしていないことになる。如何に教師がきめの細かい計画を立てても、授業の所で、一切がくずれている。一人一人の思考をどう育てるかを考えなければすべてが無駄になるのである。